

# 令和5年度 第66回 関東高等学校サッカー大会 大会総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

5月27～29日までの3日間で第66回関東高等学校サッカー大会が東京都各所で開催された。

大会は各都県予選1位の8チームをAグループ、2位の8チームをBグループとし、それぞれトーナメント方式で実施された。Aグループの1位を優勝、2位を準優勝とし、準決勝で敗退した2チーム及びBグループの1位を3位とする規定がある。埼玉県からは県予選の結果、Aグループに武南高校、Bグループに埼玉平成高校が出場した。今回は視察した埼玉県勢の試合を中心に大会を振り返らせていただくことにしたい。

武南は初日に霞ヶ浦高校（茨城県）と対戦して1－0で勝利したものの、続く準決勝での八千代高校（千葉県）戦では2－4での敗戦となった。

初戦は堅守を武器に奪ってから素早くゴールに向かおうとする霞ヶ浦に対して、MF⑩松原を中心にパスとドリブルを織り交ぜながら数的優位を作りコンビネーションで攻撃を組み立てる武南という構図となった。開始早々に一瞬の隙をつき武南FW⑬大熊がDF背後へ抜け出してGKと1対1になるが、霞ヶ浦GK①根本が好セーブを見せ、先制とはならず。対する霞ヶ浦はボールを奪ったら素早く攻撃に切り替わりシンプルに武南のSB背後を狙ってカウンターを仕掛け、シュートを打ち切って攻撃を完結させる。ともに好機を作り出すものの両チームGKが好セーブを見せ一進一退のままスコアレスで前半を終える。後半も武南がボールを保持しながらゲームを支配しようとするが、霞ヶ浦は選手交代を行い、縦に推進力のあるFW⑪安部を右サイドに入れ、MF⑩大谷を左サイドに配置転換し、FW⑭谷本とともに前半以上の鋭いカウンターを見せて武南ゴール前に迫るシーンを作り出す。スコアが動かない状態が長く続いたが、57分に武南は中盤右サイドでボールを奪いそのまま楔のパスを打ち込む。この楔のパスに反応した運動量豊富なDF⑰飯野がワイドレーンを駆け上がりペナルティーエリア内に侵入。深い切り返しの際にハンドの判定がありPKを獲得し先制に成功。追加点こそ奪えなかったものの、その後も武南は終始攻める姿勢を崩さずに試合をクローズし、勝利を取めた。

準決勝の八千代戦は立ち上がり早々ゲームが動く。まずチャンスを作ったのは武南。右サイドMF⑳大豆生田のスピードを活かした突破からサイドを崩し、中への折り返しを⑩松原がコントロールし、エリア外から右足を振り抜き先制点を奪う。対する八千代も左サイドのFW⑫須堯が個人技で切り崩すとペナルティーエリアで倒されPK獲得。これをしっかりと決め、同点に追いつく。その後も両チーム激しい球際の展開となる。武南は⑩松原を起点として、攻撃時に中央にポジショニングを取り、中盤に厚みを持たせながら、ゴールに迫っていく。対する八千代は前線から激しくプレッシャーをかけ、奪ったボールはシンプルに縦を目指すダイレクトプレーを強く意識する。守備のプレッシャーを強める八千代は相手陣内でボールを奪うと、裏に抜け出したMF⑦西村が冷静にゴールを奪い勝ち越し、前半が終了する。後半、流れを変えたい武南はHTで4人の選手を交代し、攻勢に出る。交代で入ったMF⑨戸上、MF⑦川上のコンビネーションを活かした崩しからゴールを目指すのが、八千代の素早い切り替えと粘り強い守備の前になかなかチャンスを作ることが出来ない。八千代は前半同様、奪ったボールを縦に素早く供給する事を徹底し、⑫須堯の体を張ったポストプレーから、⑦西村がパスを受けるとドリブル突破から追加点を奪う。その後武南は⑩松原の突破からチャンスを作り、クロスボールに飛び込んだ⑨戸上が頭で合わせゴールを奪うが、最後まで強度の高い守備を継続した八千代がゲームをコントロールし、勝利をおさめた。プ

レー強度の高い試合が展開されたが、武南としては初日にDFラインの要であるCB⑤齋藤を負傷で欠くなど守備陣が踏ん張り切れなかった。また、昨年同様に完成度の高い崩しを見せるものの、最後のフィニッシュの精度によってスコアの差が出るゲームとなった。(スタッツも両チームシュート数は11本で同数となっている。) それでも集中開催ということもあり、今後の大会を見据えてターンオーバーで臨むなど、多くの選手を起用した選手もそれに応えるプレーを見せていたことから、敗れはしたものの多くの収穫を得ることができた大会になったのではないかと感じている。

第2代表としてBグループトーナメントに出場した埼玉平成は、初戦の帝京第三高校(山梨県)に2-1で勝利したが、準決勝の日大藤沢高校(神奈川県)の前に0-6のスコアで厳しい敗戦となった。

埼玉平成は県予選と同様に1-4-3-3のシステムで臨んだが、予選よりも素早くFW3枚を目指し、中盤2枚が関わることで厚みをもたせゴールを狙うシーンが多かった。24分、均衡状態が続く中でロングボールから埼玉平成FW⑧佐藤が抜け出しシュートを打ち、こぼれ球に反応したMF⑩大久保が右足を振り抜き先制する。後半に入り、得点を奪いたい帝京第三が相手陣地に押し込んでプレーするも埼玉平成がしっかりと組織的なDFでゴールを隠しながら追加点の機会を窺う。47分、オープンな攻防の中でクリアを拾った埼玉平成が、足が止まった帝京第三DFラインの背後への正確なクロスを送り込む。するとこれがオウンゴールとなり追加点を奪う。終盤攻勢に出る帝京第三に1点を返され、その後もサイドから何度も崩されかかるが、最終ラインで身体を張った守備をした埼玉平成がリードを守り切った勝利となった。

続く準決勝では初戦の守備の粘りが影を潜めてしまった。キックオフ直後にGKとの1対1の場面を作られ、そのままの勢いで3分に失点してしまう。前半は最少失点に抑えたが、後半も開始早々に2失点目をしてしまう。その後も相手のSBを絡めた厚みのある攻撃に後半失点を重ねてしまい、初の関東大会は悔しい結果となってしまった。県内予選では準決勝まで無失点で勝ち上がってきただけに先制された後の修正が効かなかった。しかし、チームとして2日間とも先発メンバーは固定して臨んだものの、交代枠を最大に使うって2日間で9人が途中出場し、帯同したメンバーを多く起用しようという意図が感じ取られた。

今大会は埼玉県代表として臨んだ2チームともに悔しい結果となってしまった。しかし両チームともに今大会が総体や選手権に続く大会として多くのトライをしようとする明確なビジョンが見られたように、必ずしも悲観する必要はないと考える。武南高校に関しては決勝に残った修徳高校(東京都)と八千代の試合と比較すると、ゴール前での迫力や決定力については現時点で差があったことも事実であるが、各会場での試合を見る限り他の都県代表とも対等以上に渡り合えるように感じた。埼玉平成は予選の中で勢いによって関東大会の初出場を決めたが、本大会では隙のない戦いをすることの重要性を痛感したのではないだろうか。十分に戦える場面を作りだしていただけない、失点してしまった時間帯の修正などをしていけば今後も県内で上位進出を狙えるという可能性を見せてくれた。

総体や選手権にはプレミアリーグの昌平高校やプリンスリーグの西武台高校も参戦してくるが、今大会の経験と悔しさを糧にした両チームがどこまで良い戦いを披露してくれるのか、非常に楽しみである。